

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 8 月 19 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370030

研究課題名(和文)メディア技術の哲学的位相

研究課題名(英文)philosophical dimensions of media technologies

研究代表者

大黒 岳彦(DAIKOKU, TAKEHIKO)

明治大学・情報コミュニケーション学部・専任教授

研究者番号：30369441

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、今世紀に入って急速な進歩を遂げたソーシャル・ネットワークやクラウド、動的検索技術、電子書籍といったインターネット上のメディアテクノロジーを、ラジオ・テレビといった旧来のマスメディア技術とともに、独自の“種”をなす「技術」として概念規定し、「技術哲学」の観点から批判的省察を行った。「メディア」を技術哲学の対象とすることで、これまで個々別々になされてきた情報倫理や情報社会論、メディア史に共有可能な理論的視座を設定すると同時に、高度情報社会時代における「技術」の現段階の哲学的把握にも寄与できると考える。

研究成果の概要(英文)：In this research, I have examined internet media technologies, which include social networking services and clouds, dynamic search technology and e-books that have made rapid progress in this century. These technologies form a new 'species' of technology along with traditional mass media technologies such as radio and television. So I have inquired into these new technologies from the perspective of philosophy of technology. By setting "media" as the subject of technological philosophy, we could set up a theoretical viewpoint that would be shared in the information ethics, the information sociology and the media history. The fruits of this research will also contribute to the philosophical grasp of the present stage of technology in the information society era.

研究分野：哲学

キーワード：メディア 技術 コミュニケーション 情報社会

## 1. 研究開始当初の背景

自然科学的・工学的ディシプリンを別とすれば、メディア技術に関する洞察的・反省的研究はこれまで、主として四つの立場から独立になされてきた。一つは「メディア論」(media theory)と総称される立場で、歴史的・美学的なアングルからメディア技術を問題とする。この立場の先駆けである M.マクルーハンや W.ベンヤミンは時代的制約もありインターネットに代表される新しいメディア技術は考慮していないが、この系譜に属する F.キットラーや N.ボルツらが、デジタルメディアやネットワークメディア技術の考察を行っている。第二は、社会学の一角を占める「情報社会論」(theory of information society)である。社会学におけるメディア技術への関心は 20 世紀にはアドルノやハーバマスらのフランクフルト学派に顕著なように、マスメディアにあった。だが、21 世紀に入るとその関心先を急速にインターネットへとシフトさせ、「情報社会」という新しい社会形態の解明に精力を傾け始めている。この立場の現時点での代表格は M.カステルである。第三は「メディア研究」(media studies)である。いわゆる「カルチュラル・スタディーズ」の流れを汲む研究者、たとえば S.シャピロなどが近年、最新メディア技術を対象としつつある。第四は「情報倫理学」(information ethics)である。この立場はインターネットによって惹起された社会的秩序の混乱に倫理学の立場から新しい規範の提示によって対応しようとする応用哲学の一種であり、「メディア技術と倫理との関係性」という問題系に哲学分野において真正面から取り組む試みとして評価できる。近年「情報哲学」を提唱している L.フロリディアや R.カプーロ、我が国では土屋俊がこうした立場に属する。

ただし上記のいずれの立場も「メディア技術」研究としては十全性を欠く。「メディア

論」のメディア技術分析は、本質的洞察を孕みつつも着想の単なる提示の域を出ず、理論と呼ぶには表現も“文学的”“隠喩的”にすぎず。「情報社会論」は、実証的観察と体系的叙述を指向しはするものの、「メディア技術」への深い考察がなされぬまま、その存在が所与の前提とされてしまっており、結果として描き出される情報社会像も、現象的事実のみに依拠した表面的なものに止まっている。また「メディア研究」は、コンテンツ分析への著しい偏りが見られ、“物質的”基盤としてのメディア技術にまで目が届いていない。いっぽう「情報倫理学」は、メディア技術が惹起する諸問題についての原理的な検討は行うものの、やはり「メディア技術」そのものの存在性格の考察には未着手である。更に研究の実質的なテーマ設定がネット・リテラシーや著作権、プライバシーといった個別的な問題に限られているため、対症療法的な考察にとどまり理論的体系性を欠く傾向も認められる。

以上のような研究の現状を踏まえた上で本研究代表者は、「メディア技術」そのものの原理的で体系的な考察を、M.ハイデッガーの「配備=集立」(Gestell) A.ゲーレンの「負担免除」(Entlastung)そして三木清の「形成」といった技術に対する本質的洞察を批判的に継承しながら、伝統的「技術哲学」の拡張というかたちで行うことが最も実りが多いと考えるに至った。ただし、従来の技術哲学は、専ら人間による自然開発行為の手段として技術を捉えるため、間主体的コミュニケーションの変容・拡張である「メディア技術」の特性は、従来の「技術」観によっては掬い取れない。こうした問題意識からの「技術」概念の見直しと拡張作業が本研究の課題のコアをなす。

本研究代表者は、2006 年に公開した著書『メディアの哲学 ルーマン社会システム論の射程と限界』(単著、NTT 出版)にお

いて、ルーマン社会システム論における「メディア」概念の独自性を別出・評価する過程において、それまで専ら「媒介」手段としてイメージされてきた「メディア」が、アリストテレスの「<sup>ヒュレ-</sup>質料」(ὕλη) 概念との連続性を持つことに気づかされ、メディアを現実構成のための“素材”的原理として再措定することを試みた。そのなかで現実構成の機制であるメタ概念としてのメディアと、具体的・現象的な「メディア技術」とを明確に区別することの必要性も認識したが、当該書ではメディアと区別された「メディア技術」そのものの分析は行わなかった。2010年に公刊した著書『「情報社会」とは何か? メディア論への前哨』(単著、NTT出版)および2011年に発表した論文「グーグルによる「汎知」の企図と“哲学”の終焉」(『現代思想』1月号所収)において、Web2.0以降のインターネットやネット上のサービスを含めた「メディア技術」そのものの検討作業に着手したが、それらは依然、執筆時の事情と枠組みに制約されており断片的で且つ時務的な性格を免れていなかった。本研究において、「メディア技術」そのものについての系統だった研究に初めて本格的に取り組んだ。

## 2. 研究の目的

本研究は、今世紀に入って急速な進歩を遂げたソーシャル・ネットワークやクラウド、動的検索技術、電子書籍といったインターネット上のメディアテクノロジーを、ラジオ・テレビといった旧来のマスメディア技術とともに、独自の“種”をなす「技術」として概念規定し、「技術哲学」の観点から批判的省察を行う試みである。その際、「人間 vs. 自然」の対立構図を前提しつつ人間による自然開発の体系的手段を「技術」の典型と見なしてきた従来の「技術哲学」を、間主体的なコミュニケーションの場面における技術である「メディア技術」へ向けて拡張する作業が本研究計画の中心的な課題となる。「メディア」を技術哲学の対象とすることで、これまで個々別々になされてきた情報倫理や情報社会論、メディア史に共有可能な理論的視座を設定すると同時に、高度情報社会時代における「技術」の

現段階の哲学的把握にも寄与できると考えた。

## 3. 研究の方法

本研究計画の特色と独自性は、極めて進展の速度が早いデジタル技術・ネットワーク技術を中核とする「メディア・テクノロジー」を哲学的考察の対象として据える点にある。したがって、「メディア技術」の最先端の現状を常にフォローアップし、その意味を検討・把握する必要があった。そのために本研究では、研究開始の翌年26年度にメディア技術の現場に対する調査・取材を集中的・集約的に実施するタームを設置し、現場のエンジニアやデザイナーへの直接の聞き取りや取材を行った。27年度以降の研究は、文献研究とともにこうした取材の成果をも反映させ組み込みつつ遂行した。

## 4. 研究成果

第一に、現行の高度情報社会の可能性の条件であると同時にその屋台骨をなす「メディア技術」を哲学による批判的な解明を要する独自の対象として明確に措定できた。

第二に、その際、「メディア技術」の独自性を間主体的コミュニケーションに関わる技術である点に求め、従来の技術哲学の対象であった対自然的開発技術とは概念的に区別できた。

第三に、哲学的技術論における「技術」観を、従来の「人間 vs. 自然」という単層的な地平から、「対自然」と「間主体」という二つの軸が交差する地平への拡張を目指す視座が獲得された。

遺伝子操作や脳死臓器移植といった生命科学、また原子力開発に代表される巨大科学といった対自然的技術の発達は本来、メディア技術による間主体的なコミュニケーションの世界規模での拡大とネットワーク化抜きには成立し得ず、また実際に対自然・間主体の両技術は相互に分かちがたく媒介され連動している。本研究によって、高度情報社会の存立にとってメディア技術が如何なる役割を果たしているのかを解明するための視座を得ると同時に、現代においてメディア技術と対自然技術とが相俟つことでどのような問題系が構成されるのかを分析する理論的拠点を設定できたと考える。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

「人工知能の新次元」『現代思想』(特集 人工知能:ポスト・シンギュラリティ)43(18)  
pp.109-129,(2015-12)

「映像 身体 論へのプロレゴメナ:「映画理論」からのアプローチ」明治大学社会科学研究所紀要,53(2),pp.15-27,(2015-03)

「繰り返し と情報社会」『学證』(特集 繰り返されるもの)112(3),pp.10-13,(2015)

「世界社会と情報社会:ルーマン社会システム論の社会把握」『現代思想』(特集 社会学の行方)42(16),pp.102-116,(2014-12)

「ビッグデータの社会哲学的位相」『現代思想』(特集 ポスト・ビッグデータと統計学の時代)42(9),pp133-147,(2014-06)

〔学会発表〕(計 1 件)

「情報社会から情報社会へ」社会情報学会、2013 年度シンポジウム「情報社会論の新展開 情報とネットワークが創り出す社会」第 1 報告(2013 年 6 月 8 日)

〔図書〕(計 2 件)

『情報社会の 哲学 グーグル・ビッグデータ・人工知能』(勁草書房)2016 年 8 月,単著。

『基礎情報学のヴァイアビリティ:ネオ・サイバネティクスによる開放系と閉鎖系の架橋』(西垣通編、東京大学出版会)2014 年 9 月,共著。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

大黒岳彦

DAIKOKU TAKEHIKO

(明治大学・情報コミュニケーション学部・専任教授)

研究者番号:30369441